

あの・なはん

No.79

あの・なはん 盛岡弁で「あのねえ」と呼び掛けることば

「あの・なはん」はボランティアの「あの・なはん編集委員会」が編集しています。担当：男女参画国際課 ☎626-7525

災害と女性 そのとき、あなたは!?

3月11日、日本国内観測史上最大マグニチュード9.0の地震により東日本大震災が発生しました。盛岡では災害が起こりにくい、自分は災害に遭わないだろうと置いていなかったでしょうか。災害に対して、普段どれだけ備えができていたかを考えさせられた出来事でした。そこで、今回は防災や支援について、女性の視点で考えてみました。

意外に多い！ 盛岡の災害

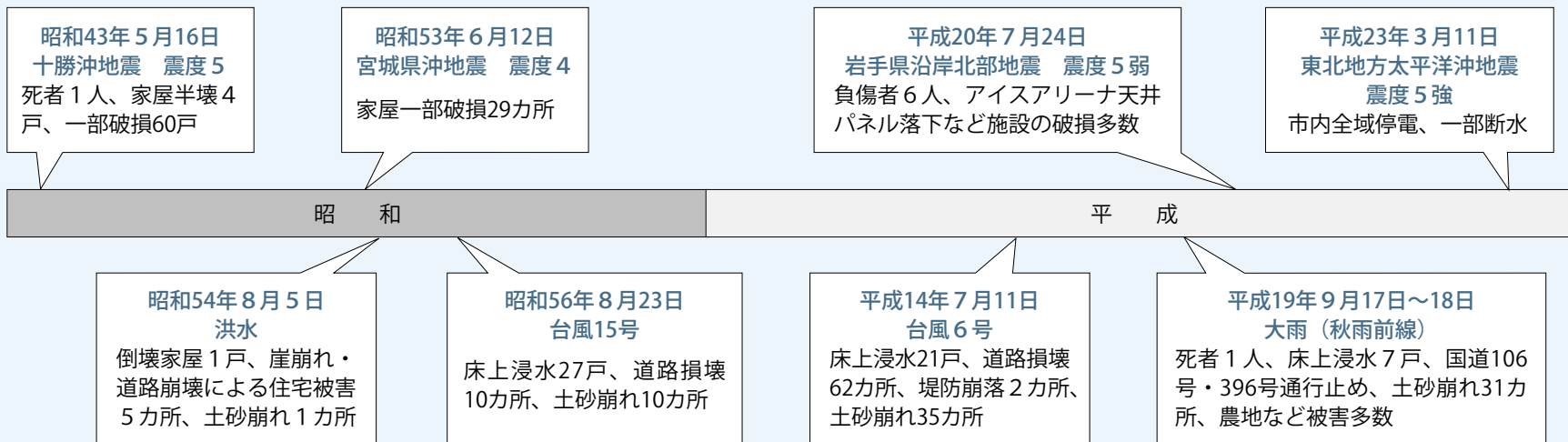
盛岡も過去に何度も自然災害に見舞われました。地震は、昭和に入ってから今回の大震災までの記録を見ると震度4が56回、震度5が7回と、強い地震が63回起きています。その後も、強い余震が続いています。台風や秋雨前線などによる大

雨では、土砂崩れや洪水がありました。その被害は市中心部や住宅地に及び、人的被害や住宅など建物の損壊を引き起こしました。

過去50年間に起こった災害の中で、市内で被害が大きかったいくつかを挙げます。



©タテハナ



参考資料：盛岡市の災害発生状況、防災・災害情報、気象庁（平成23年）

3月11日の地震当日、あなたは？

電気や水道などライフラインがストップし、市内でも多くの避難場所が開設されました。そこで、自主避難をした人や、地域で安否確認の活動をした人に話を聞きました。

★生後3カ月の子どもがいたので不安になり、おむつなどを持って城北小学校に自主避難しました。赤ちゃんを連れた家族が3家族いました。夜泣きと授乳場所がないことで周りに気を遣いました。小さい子どもがいる家庭への配慮が必要だと感じました。

二階堂真佐子さん＝みたけ四＝

★民生委員をしていて、地震当日、町内会の役員と共に高齢者世帯の安否確認を行いました。こうした地域での助け合いが必要だと感じました。

滝浦美恵子さん＝大館町＝

防災対策は自分のため、みんなのため

災害はいつ、どこで起きるか分かりません。通勤・通学の帰宅ルートや避難場所を確認し、非常持ち出し品を準備するなど日ごろから家族共通の意識を持つことも大切な防災の一つです。避難場所に食料や毛布などの備蓄品が必ずあるとは限らないので、個人でも準備しておきたいものです。

被害を最小限にするために、次のことが重要です。

- 自助－自分の身は自分で守る
- 共助－町内会・自治会や自主防災組織など地域による助け合い
- 公助－公的機関・公的企業の援助

女性のコミュニケーション力を生かし、地域の中で互いに協力し合う関係をつくっていくことはとても大切です。

困ったときは声に出して助けを求めよう

避難生活では、女性や子ども、障がい者など社会的に弱い立場の人が我慢を強いられがちです。特に、女性は困ったことがあっても周囲に遠慮して我慢したり、男性の目を

避けたいと思う場面が多くあります。東日本大震災では、女性たちは避難場所で困ったことを経験しましたが、声をあげたことで多くの問題を解決してきました。



被災しながらも支援ボランティア

3月11日に宮古市の実家が被災しながらも、被災者支援の活動をしている盛岡地区BBS会*の小笠原優華さんに話を聞きました。



盛岡大学2年
小笠原優華さん

▶家族は大丈夫でしたか？

当日、父とだけ連絡が取れ、家族は無事だということだけ分かりました。2日後に電話が通じ、家の大規模半壊を知りました。一番ショックだったのは街が変わってしまったことです。

▶支援活動の内容は？

宮古駅前、BBS会員4人で100個の防犯ブザーを女性たちに声をかけ

ながら手渡しました。女子高生に「持っていたけど流されてしまったので、うれしいです」と言われ、活動して良かったと思いました。

▶他にどんな活動を？

もりおか女性センター別館で、膨大な支援物資の仕分け作業を手伝いました。その中に「ぼくのおこづかいで買いました」というメモが入った物資がありました。支援を必要とする側と支援する側、両方の人たちの気持ちがとても良く分かりました。

▶女性への支援で気付いたことは？

被災して全て無くなった状態の中で、これが欲しいと思ってても声に出せない女性が多く、誰に言えばよいか分からない状況でした。だからこそ、支援する側の気付きが必要だと感じました。

* BBS : Big Brothers and Sisters Movementの略。青少年たちと、同世代の兄や姉のような存在として、一緒に悩み、学び、楽しむボランティア団体。

防災・復興に女性の視点を

阪神大震災や今回の震災でも、避難所生活において更衣室や授乳場所の設置など女性への配慮が薄いことが問題になりました。

問題を解決するためには、女性の意見や要望も取り入れることが大切です。防災や復興の計画策定など、政策の意思決定の場に、女性の視点や考えが反映される体制をつくるのが大事ではないでしょうか。それにはまず、女性が自分から声を出すことが前に進むための第一歩です。

震災から半年以上が経ち、新たな問題が起きています。生活の場は仮設住宅に移っています。集団生活から個別に生活することでコミュニティが崩れ、孤独や不安を感じている人も増えています。今後は心のケアが重要になってきます。被災した人に寄り添い、同じ目線で耳を傾け、きめ細かく支援することが大切です。性別や立場に関わらず、一人一人が安心して生活できる社会の復興をみんなで支えていきましょう。

女性の特性への配慮が必要

「被災地における女性支援のためのセミナー」に参加して

避難生活自体は男性も同じなのに、女性のための支援がなぜ必要なのか。編集員はそのような疑問を持って5月22日にアイーナで行われたセミナーに参加し、県立大学看護学部准教授の福島裕子さんの話を聞きました。女性の身体面、精神面の特性を考えた女性特有の救援活動が必要であり、女性の心身の悩みに寄り添ったきめ細かい支援が大切であることを学びました。セミナーの概要をまとめました。

身体面の特性：女性ホルモンと生殖機能への配慮

女性の身体面の特性である女性ホルモンと生殖機能に関することに配慮した支援が必要です。女性ホルモンは脳や卵巣から分泌され、女性の日々の身体リズムを支配する重要な役割を持っています。避難所での生活はプライバシーが保たれないのでストレスが強く、不眠や便秘、尿漏れなど体の不調を招きます。女性の生殖機能は自己コントロールできないので、自分の意思と関係なくいつでも妊娠する可能性があります。無防備な避難所などでは望まない妊娠という事態になることも起こり得ます。また、生殖器は外部と腹腔内とがひと続きになっているので、このことも気遣いが必要な点です。入浴できないことなどで、清潔が保持されないと感染症や炎症を起こしやすくなります。

精神面の特性：女性は自分のことは後回しにしがち

女性は、他者との関係性や協調性、相互支援的な人間関係を優先させるといわれます。そのため、子どもや夫など家族のために頑張り、自分のことは後回しにしてしまいがちになります。周囲に遠慮して、悩みを口にできない多くの女性がいます。

こちら編集室

○6月22日、編集員は県立総合防災センターで防災体験コースの研修を受けました。いつ自分の周りで起こるかもしれない災害に備えるための体験学習は大切だと感じました。
○福島准教授の「女性支援のためのセミナー」を受講した編集員から話を聞き、支援には男女共同参画の視点が大切であることを学び、その視点とはどういうことか考えるきっかけになりました。

(Y. M)